

## 新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。日頃から暖かいご支援ご協力を賜り、心からお礼申し上げます。年頭にあたり、学長として一言ご挨拶申し上げます。

昨年は浜松医科大学との間での法人統合・大学再編問題への取り組みについて、学部・キャンパス単位での意見交換会の開催も含め、様々なレベルでの議論を学内で進めてきました。6月には両大学間の連携協議会が設置され、これまで4回に渡って多様な問題点を巡って意見交換を行い、徐々に相互理解が深まってきたと考えております。また当初学内から出された様々な懸念もこの協議会で積極的に提起し、一つひとつ丁寧にデータに基づいてご説明してきました。今年はこれまでの議論を踏まえてより具体的な進展を図っていく予定ですので、是非皆さまのご理解をいただければ幸いです。

さて今年は戦後の新制大学設置から70年の節目の年であり、本学にとってもこの静岡大学70周年の歴史を振り返り、さらに未来に向かって進むべく決意を新たにする絶好の機会となっております。また同時に明治維新に伴って徳川家に与えられた所領について、それまでの「府中」という伝統的地名が「不忠」と同音であり望ましくないと理由から「静岡」という地名がいわば「創作」されてから今年で150年を迎えるという点でも切りの良い年となっております。「静岡大学」という大学名の指し示すものも近々変わる可能性はありますが、その前身校の時代から引き継いでいる豊かな教育・研究上の功績や伝統が失われることは決してありません。むしろ大学名に関わらず、新たな研究領域の確立やより幅の広い人材養成・地域貢献の在り方を追求することを通じて、更なる発展を遂げていく可能性が開かれていくものと信じております。

次に同じく今年開催される我々とも関わりの深い周年事業を紹介したいと思います。それは静岡県サッカー協会等の呼びかけによる「静岡サッカーのあゆみ百年祭」で、一年間を通じて多様なイベントの開催や記念誌の発行等が予定されています。昨年本学を訪問されたサッカー協会の方から、この100年の出発点は1919年の静岡師範学校蹴球部創設であることを教えていただきました。第一次世界大戦後、各地にドイツ人捕虜が収容されていたことはよく知られていますが、静岡市の日赤病院にも一時的に捕虜たちが受け入れられていて、彼らがグラウンドでサッカーをしているのを見た師範学校の生徒たちが見様見真似でボールを蹴りはじめたのが「サッカー王国静岡」発祥の起源だというお話を興味深く聞かせていただいた次第です。『サッカー静岡事始め』という静岡新聞社から出ている新書版の書物によれば、静岡師範だけでなく、浜松師範、浜松高等工業、旧制静岡高といった我々の前身校はいずれも県サッカーの黎

明期において先導的な役割を果たしており、本県のサッカー史に先人たちが残してきたこのような足跡はもっと誇りにしてもよいと思いますし、この周年事業の盛り上げには積極的にご協力したいと考えています。

もう一つ忘れてはならないのは、今年が最も古くからの海外協定校であるネブラスカ大学オマハ校との協定締結 40 周年にあたることです。例年開催されている日本・米国中西部会日米共同会議の担当がネブラスカ州だったこともあり、私はこの会議への出席と協定校訪問を兼ねて昨年 9 月にオマハを訪問し、ゴールド学長をはじめとする先方の関係者にたいへん暖かく迎えていただき、留学中の本学の学生たちとも親しく話をする機会を持つことができました。本学のグローバル化の進展に伴い、大学間協定を結んでいる大学だけでも現在では 60 大学を越えるようになりましたが、長いお付き合いを通じて培われた深い友情と信頼感に支えられた両大学の関係は何にも代え難い貴重な財産であると感じました。うまくご都合が合えば、今秋にはゴールド学長を本学にお迎えして、これまで両校の交流に御貢献いただいた学内外の多くの皆さんにも声をかけて静岡の地で盛大に 40 周年を祝うことになっておりますので、その節はまたご協力よろしく申し上げます。

国立大学運営費交付金の競争的部分の拡大や人事給与システム改革、ガバナンス改革、イノベーションへの貢献をはじめとする産学連携体制の強化、地域人材の養成や地域経済活性化と通じた地域貢献の推進等、国立大学に対しては、このところ矢継ぎ早に厳しい要求が突きつけられており、財務運営、教員評価、勤務時間管理をはじめ、来年度に向けて、これまでの大学運営のあり方を根本的に見直さなければならない点が多々出てきています。学長として必要な改革を進めることを躊躇するつもりはありませんが、創造的な教育・研究を進めるためには、大学をあまり型にはめようとしないで、その自主性を広く認める懐の深さも求められると考えています。日本政府に対しては「角を矯めて牛を殺す」というようなことにならないように、今後とも大学の教育・研究の発展を後押しすることができるようなバランスの取れた施策を是非お願いしたいと思っております。

最後になりましたが、大学という組織は社会に深く埋め込まれた存在として、本学に所属する教職員、学生のみならず、広く社会各層の皆さんのご理解とご支援によってはじめて存続・発展し続けることができます。今年もこの基本的な条件を決して忘れることなく大学運営にあたっていくことをお約束して、私からの新年のご挨拶と致します。

2019 年 1 月 7 日  
静岡大学長 石井 潔